

## 始まったばかりの4年制看護教育

江守陽子

人間総合科学研究科教授 看護学主専攻長

### はじめに

学類教育について述べるようにと依頼されましたが、医学専門学群、看護・医療科学類は名前からも推察可能なおとおり、看護学主専攻と医療科学主専攻という2専攻から組織される教育組織です。看護学主専攻は看護師・保健師等の看護専門職の養成を、医療科学主専攻は検査技術学を学び、医療分野のテクニシヤンの養成を中心として教育しています。両専攻はどちらも医療に携わる専門職者の養成が主な目的ではありませんが、専門基礎教育のうち数科目は共通ですが、専門科目はほとんど共通点がありませんので学類としてまとめて話すことが適当とは思われません。したがって、今回は看護・医療科学類のうちの看護学主専攻についての教育事情であることをまずおことわりしておきます。

### 保健医療現場の今日的問題

急加速で訪れた少子・高齢社会、核家族の増加に伴う家族機能の変化や養護力の低下、人々のライフスタイルや価値観の多様化などにより、国民の抱える保健医療の問題は非常に複雑になってきています。また、医療や経済の進歩・発展によって、多くの人は寿命を全うすることができるようになりましたが、同時に悪性新生物、心疾患、脳血管疾患を代表とする慢性疾患が増加し、治療よりもむしろ日常の介護を中心とした支援を必要とする人々の増加に拍車をかけました。さらに、医療施設内では医療技術の革新的な進歩・発展に伴い、医療がますます高度化・専門化しており、看護はもちろんのこと、保健医療活動はさまざまな専門職がそれぞれの専門性を生かしながら協力・連携することが不可欠となってきています。そして、こうした現象が看護の活動の場と役割を一層拡大させることになりま

した。

## わが国の看護教育

看護は成長・発達のあらゆる段階にある人々の健康を保ち、より健康になるように、あるいは病気や健康障害から回復するように、それもかなわぬ場合には安らかな死をむかえられるように援助することであり、人々が自立して自分の健康を保ち生活することができるような援助法や技術を解明・開発する学問であるということが出来ます。

そのためには、看護を担うのにふさわしい専門職集団としての高い見識と専門知識・技術を修得する必要があります。看護教育は戦後長い間、主に高等学校卒業後3年間の専修学校における教育が中心でした。しかし、医療の進歩や国民の看護に対する期待に後押しされ、看護の質を保障するための教育内容の見直しが求められたこともあって、短期大学での教育の時代を経て、大学における高等教育として看護学を教授するようになってきました。

平成3年まで、全国の看護系大学はわずかに10校足らずでしたが、平成17年には127校、大学院は57課程を超えるに至りました。筑波大学には今から27年前に国立大学の中でも最も早く医療技術短期大学部が設置されましたが、その後、各大学が看護系の短期大学を次々と4年制に移行して

いったのに比べ、どうしたことかそのままの状態を維持し続け、平成15年になってやっと看護・医療科学類となって第1回生を迎えるに至りました。そんな訳で、現在はまだ3年目に入っただけですので、このように教育をしています、こんな工夫をしています、などと胸を張って公言できる状況にはありません。

## 筑波大学での看護教育の現状

学生はもちろんですが、教員も半数以上が胸を躍らせて各地から筑波大学にやってきた新参者ばかりです。看護・医療科学類の母体となった、筑波大学医療技術短期大学部は27年間ほとんど施設のメンテナンスをしなかったのでしょうか、設備・備品など全体が老朽化し、教育環境としてはお世辞にも十分とは言いがたいものがあります。おまけに3年制の短大から4年制へと移行の際は、通常1学年分の学生・教職員増に伴う教育・研究棟の増築が認められるはずなのに、予算の関係で平成18年4月以降まで建設できないことが判明したことから、急遽プレハブ教室を設置し、何とかその間をしのぐことになるなど、毎日毎日驚いたり、失望したり、先の読めないスリリングな日々を送っています。

私などは小・中・高校とも第1次ベビーブーマーが通り過ぎた直後の教育を受けて

育ったので、中学校には運動場の片隅に工事現場の飯場かと見まがうようなプレハブ教室があったのを妙に懐かしく思い出したりいたしました。もっとも、今のプレハブ教室は昔のものと違って「こんな家に住みたい!」と思わせるほどモダンで空調設備も備えていて、かえって短大の教室のほうが見劣りするくらい快適です。難点をあげれば、隣の部屋の声が筒抜けで、大きな声での話し合いが難しいことくらいでしょうか。

## 入学試験状況

少子化が進み、大学受験人口もじわじわと減少の傾向にある中、開設2年目の平成16年度入学試験では、学類の存在自体がまだ世間に周知されていなかったことも一因であったと思いますが、推薦入学の定員20名のところ受験倍率は約2.5倍、前期日程1.4倍、後期日程2.8倍と、筑波大学内でも最低倍率となり、先行き心細い思いをいたしました。優秀な学生を獲得するためには、まずは受験生あるいは高校生に対する広報活動の徹底が重要と考え、大学説明会をはじめ、夏休みには高校生向けの体験学習講座、予備校説明会、高校生の大学見学の受け入れ、頼まれたら絶対断らない中学・高校への出前講義、ウェブ・サイト上の主専攻紹介ページの充実、在学生の出身高校への筑

波大学紹介パンフレットを携えての帰省時挨拶などなど、あらゆる機会をとらえて広報活動に力を入れました。その成果が少しはあったのか、平成17年度は推薦入学が2.8倍、前期日程2.9倍、後期日程では8.3倍と、他学類と比べれば依然低い倍率ではありますが、受験生数の漸増傾向という結果となりました。もっとも、入学者の出身地別では全体の約半数が関東近県者で、そのうち25%が茨城県出身者で占められており、学生が日本各地から集まってくるといわれる筑波大学にあっては、まだまだ全国的な広報活動の展開の余地があるように思います。

## 取得資格と教育のユニークな点

他大学の医療・看護系の養成機関では、取得免許は看護師・保健師あるいは助産師が主流ですが、本学の看護学主専攻では看護師・保健師、助産師の他に養護教諭1種の資格取得を可能にした教育課程となっています。

専門基礎教育課程の履修後は、ヒューマンケアの中核的担い手になりうる基礎的な専門能力(知識・技能・態度)を身につけた看護学士となるよう、将来は看護・医療専門職として医療施設のみならず地域社会において看護師、保健師、助産師あるいは養護教諭の資格を生かした活動を行えるような教育をめざしています。また、将来的

には、看護学分野の教育や研究に携わり、指導的役割を担うことのできる人材としての資質をも期待しており、そのための大学院（看護科学専攻）開設も並行して準備しています。

ところで、看護教育においてより質の高い教育とはどのようなものかについては次の3点にまとめることができると思います。

1. 自発的な学習能力を育成する
2. 対象のニーズに応じた看護実践能力を育成する
3. 現状を変革できる力を育成する

このような教育の目標実現に向けて、看護学主専攻では新しい教育方法の工夫、教員側の能力開発（教育・研究）の活性化、教員・大学組織と教育実習場とのユニフィケーションなどの方策を立てています。

なかでも、本学独自の新しい教育方法の工夫としては、4年次学生（1学期終了時予定）に対し、各看護領域の臨地実習が修了した段階で、看護実践能力評価試験 OSCE (Objective Structured Clinical Examination) を実施する予定でいます。看護の臨地教育方法は、学生が1人の患者を受け持ち、その患者および家族とのかかわりの中で、看護ニーズを判断、看護計画を立案、実行可能な部分を実践、結果を評価するという形式で行われるものですが、近年、医療機関においては医療の安全管理体制の強化が進められ

る一方、患者および家族の医療に対する意識の変化等も加わり、これまで患者を対象として実施されてきた看護学生による看護技術トレーニングは、その内容や機会が大幅に制限される傾向にあります。学生が看護師免許を持たないゆえに、看護実習内容については法的・倫理的に解決しなければならない課題も大きいとはいえ、基礎教育における看護実践能力の育成のためには大きな障害となってきています。これを補うためには、学内において模擬患者によるトレーニング体制を整備するしかありません。

OSCE は、他の看護系教育機関でも少しずつ試みられ始めているようですが、まだ確立された教育方法とはなっていません。本学では、模擬患者を活用しての教育とともに、実践能力の質を保障するための教育の一環として位置付け、人々の健康上の問題を解決するため、科学的根拠に基づく基礎的な実践能力が講義・演習・実習で培われたか否かを学生、教員が双方向に確認する目的で行うよう計画しています。

**学生を磁石のようにひきつけて離さない教育**

看護職が働く組織（病院）の給与条件や仕事の満足度が高いとき、あるいは看護職の自立性を促し、意欲を損なわず生きがいを持って働くことのできる組織（病院）は、看護職を磁石のようにひきつけて職場に定

着させることができます。看護職が辞めなければ、質の良いケアを維持しつつ人々に提供することができますから、このような組織（病院）はマグネット・ホスピタルと呼ばれ、高く評価されています。

教育プログラム、一人ひとりの教員、教員組織・大学組織がしっかりしていれば、学生に対する教育の質は保障されます。しっかりした教育を受けることができた看護学生は、やがて質の良い医療を人々に提供することができるようになります。

本学類がまさに、マグネットのように学生をひきつけ、そらさないような魅力的な組織・集団になることを強く念じているところです。

（えもり ようこ／ヒューマン・ケア科学）